

## 和辻哲郎の「情死」理解について

荒木夏乃\*

### はじめに

本発表は、和辻哲郎（1889-1960）の恋愛観に関する研究の一環として、彼の「情死」に対する理解を把握することを目的とする。和辻は、性的存在共同である男女関係（「恋愛」）が一つの人倫組織である夫婦関係として確立するためには、「世間の公認」という規定が必要であるとした<sup>i</sup>。つまり、世間の公認の有無の他には、恋愛関係と夫婦関係に違いを見出しておらず、男女二人間の関係性を同一のものと捉えているのである。したがって、和辻の恋愛観を研究する場合は、その夫婦論（二人共同体論）も辿る必要がある。

さて、和辻の構築した倫理学体系において、「恋愛」がしばしばその秩序の枠に収まらないことや、また収まらないにも関わらず追究が十分になされていないことは、既に指摘がなされている。例えば星野勉は、和辻とヘーゲルの家族論に注目した。前述の通り、和辻は恋愛関係と夫婦関係の質を同一視しているのだが、これがどれほど和辻の独自性を表しているかは、和辻が家族論を構築する際に参考にしたヘーゲルとの比較を行えば分かることである。星野は和辻によるヘーゲル『法の哲学』への書き込みから、「和辻が男女の性的関係（＝「性的存在共同」）に固執する傾向が強いのにに対して、ヘーゲルは性的関係を越えた精神的な自他の結びつきを強調する」とした<sup>ii</sup>。同時に、両者の親子・兄弟といった血縁関係に対する見解の違い

にも注目し、「和辻がそこに私的な閉鎖性を越えた精神的意義を認めるのに対して、ヘーゲルはそこに精神的意義を認めず、自然的なものしか認めない」<sup>iii</sup>とも述べた。これは両者の「人倫的組織」論に影響を与えているという。和辻の人倫組織が「家族に認められる「血縁」関係の延長上に構想」されているのに対して、ヘーゲルは「家族」「市民社会」「国家」という「異質なものを取り込んだ非連続を伴う構成」である<sup>iv</sup>。星野のこの論には、和辻の恋愛観から和辻倫理学全体を再考する契機が含まれているが、性的関係の肉体的な追究は不足している。

その点、檜垣立哉は、和辻の二人共同体論を手掛かりにしてその他者論を考え、彼の身体に関する視点を指摘した。「性的関係の直接性や赤裸々さは、このような剥きだしの身体がもつ「間柄性」そのものであるといえる。ベルソナ＝顔＝人称性は、親密性にして媒介性でもある<sup>v</sup>」とし、「直接性と媒介性の両面をそなえつつ、そのさまざまな反転（公と私としての、外と内としての）によって社会性と倫理性を構成するとされ、同時に空間性と身体性について、強い視角を提示<sup>vi</sup>」したと述べた。和辻の二人共同体論の特殊性に、彼の身体に対する認識が大きな役割を持っているという見方が提示されたのである。しかしこの論では、二人共同体の私的側面が肯定される場合の考察はなされなかった。

木村純二は、年代順に和辻の作品（『日本古代文化』『日本精神史研究』『風土』『倫理学』）を取り上げ、そこに書かれた和辻の恋愛観を再考し

\*お茶の水女子大学大学院院生

た<sup>vii</sup>。和辻が「男女の理念的な合一」を、「[家を捨て、国を捨て、ついに現世を捨てる]のような「運命」をとともにすることによって現われ出で、「情死」に行き着くものと理解」していた点に注目したのである<sup>viii</sup>。木村によれば、和辻は『日本精神史研究』において、「[情死]の彼方に「死後の世界」における救済を構想」していた<sup>ix</sup>。しかし、『風土』ではその考えが見られなくなり、「恋愛の合一の現世的意義」を示そうとするようになった。ただし『風土』においては、「[日本の恋愛]の特性は、肉体的生命を惜しまない「勇敢」や恬淡な「あきらめ」として論じられている」ため、「和辻の説く心身合一の恋愛の理念」は、「死に極まってゆくような非日常的「瞬間」に捉えられるものであって、そこから何らかの日常的行為を導き得るようなものではなかった」と考えられる<sup>x</sup>。このように和辻は、「[恋愛]における心身の合一」を集中的に論じてきたため、『倫理学』で夫婦の道徳を説く際に、男女の役割分担というような、現代の我々から見ると、やや保守的ともいえる婚姻制度を追認することしかできなかったのである<sup>xi</sup>。

木村は上記の考察に、和辻の限界ではなく、「和辻の試みた「恋愛」に関する思索の可能性を掘り下げた上で、その成否や功罪を見定めてゆくべき」である、と言葉を添えている<sup>xii</sup>。これを受けて本発表は、「情死」（心中も含む）に関する和辻の著作を年代順に辿ることにより、彼の恋愛観がその倫理学にどのような作用をもたらしたのかを考えていく。その際、木村が取り上げなかった和辻の著作にも注目する。具体的には「一校『校友会雑誌』前号（177号）批評」や「死骸」、『古寺巡礼』『日本古代文化』『日本精神史研究』『風土—人間学的考察』『倫理学』、そして『日本芸術史研究 第一巻—歌舞伎と操浄瑠璃』である。上記の著作を検討していくと、和辻倫理学における「肉体」の重要性が際立ってくる。これは、前述の檜垣が指摘した身体のことであるが、本発表では和辻の若年期における著作から一貫して用いら

れている肉体という語で論を進めていく。和辻の肉体に対する興味は、例えば恋愛を重視し浪漫主義といわれた北村透谷（1868-1894）にはない特徴であり、和辻倫理学の独自性を再考するためのキーワードになると考えられる。

## 1. 「情死」が取り上げられる和辻の著作（『風土』前）

和辻の「情死」理解は、高校時代にある程度方向性が定まっていたようである。1908年の「一高『校友会雑誌』前号（177号）批評」<sup>xiii</sup>を見ていくと、「すべての情死は人情の勝利である、暗黒でなくて光明である。君が自然主義を主張すると同時に、ローマンチックなる情死文学を他の意味において解さなければならぬ。『壺坂』の如きは特にシシボリックな復活劇として見るべきものである。君は『壺坂』を聴いて末段復活の音楽に歓喜の感を起こさなかったか<sup>xiv</sup>」とある。この『壺坂』について和辻による説明はされていないが、浄瑠璃の『壺坂霊験記』の事と思われる。盲目の夫が妻のために死に、その夫の後を追って妻も死ぬ。一部始終を見ていた観音が夫婦愛に感じ入り、二人を助け夫の目も見えるようになる、という話である<sup>xv</sup>。和辻はここで、情死を通して見出すべき「他の意味」を、この作品で説明しようとしている。他の意味とは、この場合、「復活の歓喜の感」である。つまり和辻にとって「情死」とは、この時点ですでに単なる二人の死で終わるものではなく、それによって何らかの意味を見出すべき現象、言い換えればそれを確認する第三者の視点が想定された現象だったのである。

続いて、和辻が22歳の時（1911年）に書いた小説「死骸」を見ていく<sup>xvi</sup>。この作品は、主人公の弟が情死してしまうのだが、その相手の女性が主人公の恋人であるという点で、非常に衝撃的である。当時の和辻がどのような心境でこの小説を書いたのかは不明だが、少なくとも情死事件の後の

主人公の様子まで丹念に描いている点は注目できる。彼が書きたかったのは、情死そのものではなく、情死がもたらすその後の周囲への影響だったのでないだろうか。だからこそ、主人公を情死させるのではなく、情死を知らされる役に据えたと考えられるのである。

1919年に発表した『古寺巡礼』<sup>xxiii</sup>でも、和辻は情死について記述している。中宮寺観音に関する考察の際、この像が上宮太子<sup>xxiii</sup>の文化が凝ってできたとするならば、太子は「我国最初の偉人」であるとし、次のように続けたのである。「その太子の情生活が、殆んど情死にも近い美しい死によって、——夫人は王と共に死んだのである。王の死は自然に夫人の死を伴った、——その死によって推察せられるならば、そこにはたましいの融合を信じた実現したしめやかな愛の生活がある。そうしてそれは、中宮寺観音をつくり出した人の恋としてもふさわしい。<sup>xx</sup>」この、聖徳太子と夫人の死を、情死と判断するところに和辻の独自性があるといえるだろう。和辻が情死に寄せる期待が見えるのである。なお、全集に収められている改訂版（1946年）では、この部分の改定は内容に影響のない程度に抑えられているため<sup>xx</sup>、和辻にとって情死が中宮寺観音への理解に不可欠であるという見解は、生涯変わらなかったと考えられる。また、和辻はこれら「最初の事象を生み出すに至った母胎」を、「我国のやさしい自然であろう」としている<sup>xxi</sup>。ここに、のちの風土論、日本文化論へ展開する思想の片鱗が見えている点でも、『古寺巡礼』は重要な著作といえる。

1920年の『日本古代文化』は、「仏教文化の影響を受けない時代の、日本文化の真相を明らかにし」た著作である<sup>xxii</sup>。この作品で和辻は、

日本民族の気稟を観察するについては、まず我々の島国の親しむべく愛すべき「自然」の影響が考えられなくてはならぬ。我々の祖先は、この島国の気候風土が現在のような状

態に確定したところから、漸次この新状態に適応して、自らの心身状態をも変えて行ったに相違ない。もしそうであれば、我々の考察する時代には、すでにこの国土の自然が彼らの血肉に浸透し切っていたはずである。<sup>xxiii</sup>

と述べ、文化に自然が関連していることを挙げている。そのうえで、日本の上代の恋愛には「恋愛の自由、愛と婚姻との同義」があるとした<sup>xxiv</sup>。このような特徴がある以上、和辻は日本の上代の「恋愛の高潮を歌うものが悲劇的な「愛の勝利の歌」であることも不思議ではない<sup>xxv</sup>」と考え、悲劇的な愛の勝利の歌として、古事記の軽の太子とその妹軽の郎女との恋物語における数首を挙げた。これらの歌の後に、二人は情死するが、和辻はこれを「その情死とこれらの歌との実際の関係はともかくとして、少なくともこれらの歌には、情死に終わるにふさわしい強い情熱が認められる<sup>xxvi</sup>」と捉えた。また、「愛を生かせるために家を捨て、国を捨て、ついに現世を捨てることもまた当然でなくてはならぬ。すべてこれらの歌において恋愛は最高の生である。そこには心の炎が肉を通じて燃え上っている。いかなる現世的な障礙もこの炎を消すことはできない。死にさえも愛は勝つ。かくの如き愛の強さがまことに上代の恋愛の特徴である。<sup>xxvii</sup>」とも言っている。彼は、日本的文化の特徴として恋愛を見出し、また、恋愛を最高の生と言い切り、かつそれが最も強く表れた例（愛が勝った例）として、恋愛上の死である情死を挙げたのであった。

1926年の『日本精神史研究』でも、上代の文化について情死を用いた解釈がなされている。

古事記によって知られるように、彼らは天真に現世を楽しんだ。恋愛は彼らにとって生の頂上であった。しかしこのことはまた逆に彼らが天真に現世を悲しんだことをも意味する。恋愛に生の頂上を認めるころは、やが

てまた情死に生の完成を求めるころである。古事記の最も美しい個所がすべて情死に関していることを思えば、このことは決して過言でない。まことに彼らは、享樂に対して新鮮な感受性を持ったがゆえに、またその享樂の失われる悲哀に対しても鋭い感受性を持ったのである。<sup>xxxiii</sup>

和辻は同時に、上代人が「死」に代表されるような運命を揺るがす不安を「現実の人生の不完全」と捉えていたと指摘した<sup>xxx</sup>。彼らは現世を悪とはみなしていないものの、「地上のここでないところ」に「死なき国」を求めていたのである<sup>xxx</sup>。「永遠を欲する」彼らは「永遠を基準として過ぎ行くものを評価」したという<sup>xxxii</sup>。しかしこの考えは思想的な形をとらなかつたため、我々は「幽かな常世の国の伝説や、また悲しい恋を歌う情死の物語のうちに見いださねばならぬ」と和辻は述べた<sup>xxxii</sup>。

ここまでの確認で、まず和辻が、若い時分から、「情死」を第三者に何かを訴えかけるものと捉えていたことがわかる。明言はしていないが、おそらくこの時から和辻は、情死を、「恋愛」が「最高の生」であることの最もよい例と考えていたのだろう。その後、彼が日本文化に関心を寄せたことによって、日本文化論と、生の最高の証としての情死が結びついていく。この流れが最も詳しく説かれているのは、1935年発表の『風土』である。

## 2. 風土論概略

和辻は、日本人の特殊な存在の仕方を「豊かに流露する感情が変化においてひそかに持久しつつその持久的変化の各瞬間に突発性を含むこと、及びこの活発なる感情が反抗においてあきらめに沈み、突発的な昂揚の裏に俄然たるあきらめの静かさを蔵すること」<sup>xxxiii</sup>と表現する。ここでは、日本人を表す言葉として「あきらめ」が用いられる。

あきらめとは、「淡泊に生命を捨てる」現象に最も顕著に現われるものであり、日本人が反抗や戦闘の際、根柢にあるはずの「生への執着」を否定する態度がこれに当たるとされる<sup>xxxiv</sup>。和辻は、この特殊な存在の仕方を『古事記』や『日本書紀』をはじめとする、あらゆる時代の恋愛譚に見出した。そして、日本的な恋愛の類型を、「全然距てなき結合が目指されるしめやかな情愛」「常に肉体的」「肉体的生命を惜しまない恋愛の勇敢」「全然距てなき結合が肉体においては不可能であるとのあきらめ」と定義したのである<sup>xxxv</sup>。彼はこのとき「情死の現象において拡大せられるまでもなく、恋愛を常に肉体的に把握している日本人が肉体的に最も恬淡であることによって示されている。そこで日本の恋愛の型は、恋愛を魂の事件として把握しつつも肉欲的に執拗である他の型よりも、一層高き品位を保っているのである<sup>xxxvi</sup>」と述べた。これは、「情死」が「全然距てなき結合が肉体においては不可能であるとのあきらめ」を明白に表すものであることを示すと同時に、和辻にとって、日本人の特殊な存在の仕方を最もよく表す現象であったことが分かる箇所である。「情死」という恋愛における死にあきらめを見出し、それによって他と恋愛の型との差別化だけではなく、品位を感じ取るという姿勢は注目に値するだろう。和辻倫理学における「情死」の特別性がうかがえる。

更に本作では、上代以外の恋愛譚についても言及がなされている。

徳川時代の文芸が好んで主題とした情死のごときも、単に精神的な「あの世」の信仰にもとづいたものではない。それは生命の否定において恋愛の肯定を示しているのである。恋愛の永遠を欲する心が瞬間的な昂揚に結晶するのである。たといそれが人間の男女としての役目のゆえに他のあらゆる役目を蹂躪するという意味において人間の道はずれてい

るとしても、それによって日本的なる恋愛の特性を示しているということには変わりはないのである。<sup>xxxvii</sup>

ここでの、和辻が情死を「生命の否定において恋愛の肯定を示した」もの、並びに「恋愛の永遠を欲する心が瞬間的な昂揚に結晶した」ものという表現からは、やはり、情死を確認する（見届ける）第三者の視点が意識されていることが分かるだろう。

本作でもう一点注目したいのは、「死」への言及である。情死は恋愛における死である。したがってこれを無視することはできない。「人は死に、人之間は変わる。しかし絶えず死に変わりつつ、人は生き人之間は続いている。それは絶えず終わることにおいて絶えず続くのである。個人の立場から見て「死への存在」であることは、社会の立場からは「生への存在」である。そうして人間存在は個人的・社会的なのである」<sup>xxxviii</sup> これは、情死にも当てはまる見解である。「生命の否定」が「恋愛の肯定」を示す情死を行った二人は、それを見つめる第三者（社会の立場）の目には、「最高の生」への存在として映る、ということであろう。

### 3. 「情死」が取り上げられる和辻の著作（『風土』後）

彼の主著である『倫理学』では、情死が前面に立って議論されることはない。これは本作の目的を思い返せば無理からぬことである。倫理という、すべての人に通用する「なかま」の「すじ道」を説明しようとする著作において、恋愛の最高の形である情死はあまりに局所的な話題である。しかし本作でも、「心中」として、男女の情死は取り上げられている<sup>xxxix</sup>。これは、人間が単に個人的契機のみを持つ存在ではない（社会的契機も含む）という議論で見られ、肉体に着目して論じ

られる。他人の肉体を、一切の資格がない生理的なものと見るには設備が必要である。この設備について和辻は明言しないが、おそらく遊郭の類を想定していると考えられる。和辻は心中の現象に、人々が設備によって強制的に単なる肉体と見なされることへの限界を見た。「心中とは人が単なる肉体であるとの考えに対する実践的な反駁である<sup>xj</sup>」という言葉がまさにこれを表している。つまり、どんな状況下であれ人間関係（この場合は恋愛関係）が結ばれる例として、心中が用いられたのである。なお、『倫理学』では「恋愛」論において、肉体の「形」が無限の魅力・引力を持つと述べられている<sup>xii</sup>。肉体の持つ「形」は、「唯一回的な個性の表現であり、またこの人格の生の表現なのである。従って性別による牽引はここでは一定の個性的な男女の間関係になる<sup>xiii</sup>」とある。また、恋愛関係の私的な面に注目し、「広い人間の愛を妨げ人の客観的な創造活動を阻害するもの」として排斥されうる可能性も指摘している<sup>xiiii</sup>。しかし、彼は、「男女の愛における共同存在は一つの人倫組織である<sup>xv</sup>」という表現によって、その恋愛の私的な側面を容認する姿勢を崩さない。

1955年に発表された『日本芸術史研究 第一巻 一歌舞伎と操浄瑠璃』では、『曾根崎心中』について、心中の場面を「まざまざと、あくどいほどに描き出した」ことで、「陶酔などという境地とははなはだ縁の遠いもの」でありながら、その「芸術的陶酔は、かえって印象を強められたであろうと思われる」と評価している<sup>xvi</sup>。まさに、和辻は情死における「死」という、いわば「生命の否定」の描写に力を入れた結果「恋愛の肯定」という結論を強く受けることができた喜びを表しているのではないだろうか。これは、風土論を踏襲していることを示すと同時に、和辻が情死を、第三者として眺める立場を持ち続けていたことの証ともとることができる。

## おわりに

『日本古代文化』では、「心の炎が肉を通じて燃え上っている<sup>xvi</sup>」のが恋愛である、との表現があった。風土論においては、恋愛の肉体的な、肉体的なあきらめの表現として、情死が述べられた。そして『倫理学』においては、肉体的な人間結合（間柄的意義）を表す事例として心が挙げられ、「恋愛」論では肉体による個性の重要性が説かれている。この、和辻の著作における「恋愛」と「肉体」と「情死（心中）」の相互関係は注目すべきだろう。恋愛は常に肉体的であるが、全然隔てなき結合が肉体においては無理であるというあきらめから情死が発生し、その情死は恋愛の肯定を示す。また、情死は肉体が間柄的意味を持つものであるということを示し、肉体は恋愛関係の代替不可能性を表す重要な要素であり、恋愛はその間柄性を情死（心中）で表現する。つまり、和辻倫理学における「情死」は、恋愛関係という私的共同体の極まった現象でありながら、肉体という要素に裏打ちされることによって、第三者からの非難を受け入れないどころかその者を陶醉へと導くような印象で昇華され、その私的側面の危うさを黙殺されているのである。和辻倫理学における「情死」は、このような特殊ともいべき独自の位置付けがなされており、今後も和辻の思想を再検討していく上で、欠かすことのできない問題であると考えられる。

## (注)

- i 和辻哲郎『倫理学』上（『和辻哲郎全集』第10巻、岩波書店：東京、1962年）p.352。以下傍点は原文による。
- ii 星野勉「和辻哲郎とヘーゲルの「家族」論の比較研究」（濱田義文『和辻哲郎の思想と学問に関する基礎的研究』（課題番号03451008）、平成3年・4年度科学研究費補助金一般研究（B）、研究成果報告書、1993年）p.56。
- iii 同上。
- iv 同上、p.57。
- v 檜垣立哉「和辻哲郎の二人共同体について—二人であることの秘私性と媒介性—」『思想』第1061号、岩波書店：東京、2012年、p.41。
- vi 同上。
- vii 木村純二「和辻哲郎における「恋愛」概念の葛藤について」『東北哲学会年報』28、東北哲学会：仙台、2012年。
- viii 同上、p.44。
- ix 同上、p.45。
- x 同上。
- xi 同上。
- xii 同上。
- xiii 和辻哲郎「一高『校友会雑誌』前号（177号）批評」（『和辻哲郎全集』第20巻 [増補改版]、岩波書店：東京、1991年）。
- xiv 同上、p.84。
- xv 戸板康二解説「壺坂靈験記」（戸板康二・利倉幸一・河竹登志夫・郡司正勝・山本二郎監修『丸本世話物集』『名作歌舞伎全集』第7巻、東京創元新社：東京、1969年）参照。
- xvi 和辻哲郎「死骸」（『和辻哲郎全集』第20巻 [増補改版]、岩波書店：東京、1991年）。
- xvii 和辻哲郎『初版 古寺巡礼』筑摩書房：東京、2012年。
- xviii 上宮太子、という呼称は原文による。
- xix 前掲『初版 古寺巡礼』p.291。
- xx 和辻哲郎『古寺巡礼』（『和辻哲郎全集』第2巻、岩波書店：東京、1961年）p.191。漢字表記をひらがなに変える、語尾を整えるほか、大きな違いとしては引用部の最後「そうしてそれは～」の変更があるが、初版より冷静に、客観的な書き方を心掛けただけのようなのである。中宮寺観音と、最終的に情死するような太子の愛の生活を結び付けようとする姿勢は一貫して存在する。
- xxi 前掲『初版 古寺巡礼』p.291。
- xxii 和辻哲郎『日本古代文化』（『和辻哲郎全集』第3巻、岩波書店：東京、1962年）p.11。これは初版序にあたる部分である。なお本書第一章で和辻は、考察対象とする時代を、自分が知ろうとしている時代の日本民族は、「すでに永い年月をこの国土に送り、すでに一つの民族となり、石器の使用より金属の使用に、漁獵時代より農業時代に移っていた。我々の上代文化観察はかくのごとき「できあがった日本民族」を出発点としなくてはならぬ」（同書、p.23）と規定している。
- xxiii 同上、p.23。
- xxiv 同上、p.248。
- xxv 同上。

- xxvi 同上、p.249。  
xxvii 同上、p.251。  
xxviii 和辻哲郎『日本精神史研究』（『和辻哲郎全集』第4巻、岩波書店：東京、1962年）p.34。  
xxix 同上、p.35。  
xxx 同上。  
xxxi 同上、p.36  
xxxii 同上。  
xxxiii 和辻哲郎『風土』（『和辻哲郎全集』第8巻、岩波書店：東京、1962年）p.138。  
xxxiv 同上。  
xxxv 同上、p.140。  
xxxvi 同上。  
xxxvii 同上、pp.139-140。  
xxxviii 同上、p.16。  
xxxix 前掲『倫理学』上、p.64。  
xl 同上。  
xli 同上、p.348。  
xlii 同上。  
xlili 同上、p.351。  
xliv 同上、p.352。  
xlv 和辻哲郎『歌舞伎と操り浄瑠璃』（『和辻哲郎全集』第16巻、岩波書店：東京、1963年）p.661。  
xlvi 前掲『日本古代文化』p.251。